

ニッセンケン分室「思いつきラボ」No. 94

シャンブレーのシャツと ダンガリーのシャツ・・・



連日の猛暑や大雨が続く今年の夏はテレビニュースの天気予報の時間が長く割り当てられている感じがします。解説を聞いていると最高気温が 35℃ 以上の日を「猛暑日」と予報用語になったのは 2007 年からとのことで 我々 60 歳代の会話に「昔の夏はここまで暑くはなかった」とよく出てくるのは正しかったようだと思わずに納得しております。クーラーなんてものがなかった時代を過ごしてきたわけですから「猛暑日」という用語がまだ 10 年しか経ってないことにあらためてここ数年の地球温暖化の速さに心配してしまいます。夜の最低温度が 25℃ 以上の「熱帯夜」も珍しいものではなくなりました。

筆者の夏の服装といえば 平織りのオックスフォードの綿シャツとジーンズというのが定番なのですが 白無地のシャツはともかく色物を着ていると「涼しげなダンガリーシャツだね」と声をかけられ「これシャンブレーです」と返すと「どっちでも一緒だろう」と言われて・・・これって“思いつきラボ” 向きの会話だと感じたので今回のテーマとします。「ダンガリーのシャツ」はメジャーで「シャンブレーのシャツ」はあまり耳にすることがなくなっているのかもしれない。シャンブレーの生地はたくさん市場に出回っているのですが・・・



ダンガリーとシャンブレーの織組織

まず「ダンガリー (Dungaree)」ですが組織は綾織で「シャンブレー (Chambray)」の平織りと組織から違います。近くで見れば違いはあきらかなのですが 遠目に見ればどちらも杳調（もくちょう）なので判別しにくいのもかもしれません。織組織（おりそしき）としては 3/1 のツイル（たて糸 3 目よこ糸 1 目の割合で表に出る組織）でたて糸に晒（さらし）糸 よこ糸に色糸を使ったものになります。この 3/1 のツイルといえば デニムの生地と一緒に・・・と思われた方 正解です。デニムとダンガリーの違いと言えば

デニム ・・・ たて糸が色糸 よこ糸が白糸の 3/1 ツイル
 ダンガリー・・・ たて糸が白糸 よこ糸が色糸の 3/1 ツイル

ということになります。実際にはデニムはボトム素材として使われ ダンガリーはシャツ素材に使われることが多いので糸番手も異なりデニムが厚手でダンガリーはデニムよりは薄手の生地になります。もちろん糸番手を同じにすれば生地厚も同じものが作れますので

ダンガリーはデニムの一種と取り扱われることもあります。ダンガリーの語源は西インドのダングリ（Dungri）という地域で作られていたのが起源といわれています。

一方のシャンブレーも先染めで杣調に仕上げているのですが こちらは平織の組織になります。

シャンブレー・・・ たて糸が色糸 よこ糸が白糸の平織
 ダンガリー・・・ たて糸が白糸 よこ糸が色糸の綾織

ということになります。同じ糸番手で生地を作れば綾織の方が平織より厚みが出るので重くなりますので シャンブレーの方がさらに薄手の生地ということになります。ただし糸番手が異なれば生地厚もかわってきますのでどちらが厚い 薄いは決めつけないほうがいいと思います。筆者が着ているものはオックスフォードシャンブレーでたてよこ 2本ずつ糸を引き揃えた組織のものになりますので 厚みのあるシャンブレーということになります。

色糸と白糸がシャンブレーですが 異なる色糸と色糸の場合は玉虫効果のある生地が出来ます。昆虫の玉虫の羽のように光の加減でチラチラとした色の変化がたのしめます。一般的には玉虫の生地と呼びますが分類として玉虫もシャンブレーの一種と分類されることがあります。シャンブレーの語源はフランスのカンブレ（Cambrai）が生産発祥の地とされていてカンブレが転じてシャンブレーになったという説が有力とされています。ということで「ダンガリーのシャツ」と「シャンブレーのシャツ」は別のものであるということを理解しておきましょう。

杣調の生地づくり



杣調の生地を“霜降り柄”と呼びますが 霜が降りたように白い斑点があるという意味合いなのですが 最近では霜降りといえば牛肉の赤身と白い脂身の模様をイメージする人が増えてきています（そんなことはありません!!）。霜降り柄を表現する方法として ダンガリーやシャンブレーのように色糸と白糸を織り方で造り出す場合と糸そのものを杣調にしたものを使うことで霜降りにすることがあります。とくにニットの場合はたて糸 よこ糸の区分ができませんので杣糸を使うことが多くなります。

杣糸にも種類がありまして 紡績のトップ工程という段階で 生成りベースのところに色糸を混ぜ合わせる方法でウール糸ではトップ杣という呼び方をしています。また色糸を撚り合わせて杣調にする糸を撚り杣（よリモク）とか糸杣（いともく） 合撚杣（ごうねんもく）という呼び方をします。3本で撚ったものを三つ杣（みつもく） 4本を四つ杣（よつもく）という言い方をすることもあります。このほかにも職場や素材による業界の違いでいろいろな

呼称があります。さらに綿の杻糸などは紡績の段階で綿にポリエステル糸を少量だけ混ぜて造り、後染めの段階で綿染めしてポリエステル部分だけが白く残るという手法で作られることもあります。杻調の糸といっても作り方にもいろいろあるのです。

もう少し涼しくなれば、シャンブレーのシャツに、ダンガリーのジャケットを羽織り、デニムのジーンズでコーディネートすればちょっとした“杻調ファッション”を自慢できるかもしれません。きっとみんなに「それがどうした」と声を掛けられると思います。

原稿担当：竹中 直(チヨク)

